

海女の宿 心地よい場所づくりを

みなとやゲストハウス / イターニン 大川 香菜



舌岐島：玄界灘にある面積139km²の島。人口26,936人(平成29年10月末現在)。古くから大陸文化の中継地として重要な位置にあり、「魏志倭人伝」には「一支国」と記されている。島の南西部にある国内最大級の弥生環壕集落「原の辻遺跡」をはじめ、島内には縄文・弥生時代の遺跡が多い。

海が好きで海女を目指す

舌岐暮らし五年目。現在私は、海女をしながら夫と「みなとやゲストハウス」という宿を経営しています。

私はもともと、岩手県の出身。父は遠洋漁業の漁師で実家は民宿。小さい頃から海が好きで、磯遊びや海水浴をしたり、友だちとお菓子を持って海を見ながらお喋りをしたり。夜寝ている時は遠くから波が打ち寄せる音が聞こえる、そんな環境で育ちました。

高校卒業後は、服飾専門学校への進学のため上京。それから約九年間は東京でアパレル関係の仕事をしていました。都会の暮らしも楽しかったのですが、気軽に海に行けない環境に少しストレスを感じていて、いずれは海の近くに引っ越し、漁師の嫁か海女さんをしてながら暮らしたいな。

と冗談半分、本気半分で考えていました。

そんな時に東日本大震災が発生。故郷はもちろん日本各地が大きな被害に遭い、私は岩手にいた家族を連れて親戚のいる長崎へ一時避難しました。生きていることが当たり前ではないことを実感した出来事です。

その後、家族は岩手に帰郷、私も東京へ戻りましたが、もとの暮らしに不安を覚え、とにかく何かあった時のため九州に一つ拠点を持つておきたいと思い、長崎に移住することを決意しました。

長崎で仕事と家を見つけ生活が落ちついた頃、人生で何をしなかったら後悔するのか、本気でこれからの生き方について考えました。その時に素直に自分の心に残ったものは海での暮らしです。海女の仕事は、海に潜って収獲したもので生計を立てるシンプルな生活です。私はそういう暮

らしがしたいと強く思い、「海女の就職活動」をはじめました。会う人、会う人に海女になりたいと伝え続け、プールで潜水の練習をしたり、海女ができる場所がないか情報収集をしていました。

そんななか、地域おこし協力隊をしている友人から、壱岐市で海女を募集するらしいという朗報を聞き、すぐに応募。当時、壱岐では約六〇名の海女さんがいましたが、二五年間後継者がいない状況でした。

二〇一三年五月に壱岐に移住し、間もなく海女修行がスタート。五月からムラサキウニ漁が最盛期となるため、私は三人の海女さんについて漁を習いました。壱岐は、資源を守るためにウエットスーツを着ることでできない地域。五月の海は寒かったです。潮の時間に合わせて漁に行き、休憩は磯場でお弁当を食べたり、お茶を飲みながらお喋りをしてまた漁へ、帰ったらウニかきをして出荷、家に戻ったら心地よい疲労でぐっすり眠るといふ自然に合わせた暮らしを送りました。これは子どもの頃の心地よかった記憶、東京での暮らしでは忘れていた生きている実感です。

海女文化に触れることのできるゲストハウスを

望んでいた暮らしを実現できたことに喜んだ反面、約半年の海女漁の稼ぎだけでは一年間の収入を得るのは難しいという現実を知り、海女のほかに収入源

が必要であると考えました。同時に、壱岐の海女文化を知ることが出来る場所が島内になかったため、海女の暮らしを感じられる交流拠点をつくって、実際自分で収獲したものを食べてもらいたいなと思いました。

今の主人との出会いはそんなタイミングです。主人は釣りを通してさまざまなところを旅しており、旅先でいろいろな人たちと交流をしていく中で、自分の地元である壱岐に旅人や地元の方が交流できるゲストハウスをつくりたい、という夢を持っていました。彼の実家は、祖父の方針で中国の残留孤児や旅人などを泊めるなど、人々が集まるまさに

無料のゲストハウスのような環境だったそうで、彼自身は人を迎えるのにまったく抵抗がなかったようです。私も旅先でゲストハウスを利用することもあり、これであれば自分たちの個性が出しやすく、交流も生まれやすいと考えました。

それから二人で物件探しをスタート。紆余曲折あり一年半かかって今の物件に出会いました。空家は多くても相続問題や持ち主に連絡がとれないなど、この物件探しがゲストハウスを開業する上で一番苦労しました。



「みなとやゲストハウス」オープン時に集まってくださった地域の方々（筆者は中央）。



海女漁のシーズンに実施するウニかき体験の様子。

半年をかけて改装。私の協力隊の任期終了後の二〇一六年四月に、「みなとやゲストハウス」をオープンすることができました。改装はなるべくお金をかけずに愛情をかけた解体や内装などは島内外から協力者を募って行いました。資金の一部はクラウドファンディングを利用、たくさんの仲間や支援者たちが関わってくれました。今でも改装時の写真を見るたびに多くの方々の好意を思い出し、心が温かくなります。

年中通して島暮らしの良さを体験できる工夫

私たちの宿では、五月から九月の海女漁のシーズンには採れたてのウニかき体験をしています。主人は釣り体験やカヤックなどのアクティビティを行い、夜は釣った魚と島の食材を使用したお任せ料理を提供し、ゲストの皆さんと一緒に食べる形式にしています。

壱岐の観光業の最盛期と海女漁の忙しい時期が重なっているのです。この期間は朝から晩まで目まぐるしく動く、体力勝負です。冬場は忙しさが落ち着く分、ゲストの皆さんとじっくり話したり一緒に温泉へ行ったりしま

す。なにより魚がとても美味しい時期なので、皆で釣りに出かけ、釣った魚でお寿司をつくったりなど、冬の島暮らしの楽しさも感じてもらえるような工夫を行っています。

また、ゲストさんがより近い壱岐の暮らしを体験できるよう、そして地域の人も立ち寄りやすい場所にするため、夏場は子どもたちにかき水を提供したり、一階のカフェスペースを宿泊者以外にも開放しています。

壱岐での豊かな暮らし

壱岐での暮らしが一番感じることとはとにかく生活がしやすいということ。スーパーでは地元の野菜が買え、生活用品も揃っています。また、博多港まで高速船で一時間の距離なので気軽に都会にも行くことができます。

そして何より最高の食材が年間を通して楽しめます。今までの人生で「最高の食事」を、お金をかけずにできると自信をもって言えます。「最高」とは、その土地でとれた旬の野菜や果物、魚介類を日常的に食べられること。物々交換で魚が野菜やお米に変わるなんて当たり前です。魚もスーパーで切り身になったものを買うことはなくなり、まるごと一本を捌くようになりました。自分が生産者として収穫する立場になったことで、食べ物のありがたさを感じることもできています。

宿はオープンして二年目。運営面などではまだまだ改善することはありますが、ゲストの皆さんや地域の方々

行政からのメッセージ

●島内外の人々を惹きつける海女さん女将

長崎県の離島・壱岐は、九州と朝鮮半島の間に位置し、福岡からジェットフォイルを使えば1時間で行ける、海産物・農産物の豊富な島です。壱岐島の特産品はウニ。八幡地区では今なお海女さんが素潜りでウニ漁をしております。近年、海女さんの高齢化が進み、また、後継者もいない状況でした。

そこで「海女後継者」として、地域おこし協力隊を募集したところ、大川香菜さんが応募され、平成25年に彼女を採用いたしました。

大川さんの活動は、自分自身が海女後継者として自立していくことのほか、海女の魅力発信を行い後継者を増やすこと、地元でとれる海産物を活用した商品開発などです。協力隊となった時期は、ちょうどNHKの連続テレビ小説「あまちゃん」が放送されたタイミングで、多くのテレビ局や新聞社などから取材があり、壱岐のPRにもつながりました。

大川さんの魅力は、誰とでも笑顔で接し、コミュニケーションに長けているところであり、また人を惹きつける力もあります。そのため、海女さんたちの中に溶け込むのも早く、多くの取材や関係者の方とも親しくされていました。

協力隊の退任後にゲストハウスを開業すると決めており、協力隊の活動期間中から、各地のゲストハウスを視察したり、研修に参加するなど起業に向けて取り組まれていました。

「壱岐島初のゲストハウス」をつくりたいと、総務省の「地域おこし協力隊ビジネススタートアップモデル事業」を活用したり、クラウドファンディングを実施。資金提供された方、各地域の協力隊の方、地元の関係者など多くの人々の協力を得ながら、「自分たちでできることは自分たちの手で」と、宿の随所に手づくり感・温かみのある「みなとやゲストハウス」が平成28年4月に完成しました。

現在では宿泊客のほかにも、移住を予定されている方、他の地域の協力隊など多くの方々が訪れるスポットとなり、活発な情報交換が行われております。

地域おこし協力隊として、壱岐に来てから5年。起業・定住され、そして夫婦になり、子どももできました。海女さんとして、ゲストハウスの女将として、また移住を考えられている方のアドバイザーとして、今後も頑張っていたきたいと思います。

(壱岐市企画振興部政策企画課 斉藤弥寿孝)

大川香菜 (おおかわ かな)

1984年生まれ。岩手県陸前高田市出身。高校卒業後、アパレル関係の仕事しながら約9年間東京で暮らす。東日本大震災後、長崎市に移住。2013年5月、海女後継者として壱岐市地域おこし協力隊に採用され、2016年まで活動。現在、夫と芦辺地区で「みなとやゲストハウス」を経営。1児の母。

しんでももらえるようなイベントを企画したり、心地よく過ごせる場所づくりをこれからも続けていきます。

今後は、ゲストハウスがある地域周辺がもっと盛り上がるように、宿泊ゲストさんにも楽しめる場所をもう一つつくりたいと考えています。そのためには仲間が必要、今はそ

の準備段階です。不安もありますが、限りある時間を思い切り楽しみながら、人生で後悔しないように思いを実現していきたいなど考えています。昨年六月に第一子を出産し、育児に仕事に、自分の好きなことに慌ただしくなりそうですが、これからも笑って過ごしていきます。